

エーリヒ・シュミットの『シュトルム論』をめぐって
 Zum Essay <Theodor Storm> von Erich Schmidt*

田 中 宏 幸
 Hiroyuki Tanaka

シュトルムがヴェルツブルクで、若き日のエーリヒ・シュミットに偶然巡り会ったのは、1877年2月のことであった。シュトルムのヴェルツブルク訪問の目的は、本来心楽しいものではなかった。すなわち前年の夏に続いて、長らく医学生を続けていた長男ハンスを激励し、なんとか医師試験に合格させるためであった。ハンスは父親シュトルムの悩みの種で、すでに十年近く在学していたが、意志薄弱で酒に溺れ成業が危ぶまれていたのである。しかし、この激励の旅が効を奏したらしく、ハンスはこの年の7月には医師試験に合格している。もちろん、これですべてが解決したわけではなかったが、とりあえずシュトルムは安堵の胸をなで下ろすことができた。こうした旅ではあったが、詩人・作家シュトルムと文学史家シュミットとの出会いは、大きな収穫であった。シュミットは1874年弱冠二十一才でヴェルツブルク大学講師に就任、当時シュトラースブルク大学教授への招聘を受けていた二十四才の新進気鋭のゲルマニスト、シュトルムはすでに詩人・作家として名を成した円熟の五十九才。シュトルムはヴェルツブルクに2月6日から3月7日まで滞在、シュミットにいろいろ個人的な出来事や経験を伝え、自作を朗読、また小説や抒情詩の執筆のきっかけや成立の経緯など、いわばその舞台裏を披露し、さらに、共に様々な文学作品について論じ合っている。この若き文学史家との出会いが、どんなに大きな印象をシュトルムに与えたかは、3月12日付けのシュミットの書簡に答えて、16日付けでシュトルムが送った最初の書簡に書き添えられた詩行に示されているであろう (SS,I,21)¹⁾。

「私はあなたの手をとりました。
 その手を私は離さないでしょう。
 若い友よ、私の心からの願いは、
 あなたが私の良い友になることです。」

* Anfragen sind zu richten : Prof.Hiroyuki Tanaka,Kanazawa University,Department of German, Marunouchi 1-1,Kanazawa/Japan

1) 文献は著者名または略号で引用。文献表参照。ローマ数字は巻、アラビア数字はページを示す。また引用のなかの引用符は〈 〉を、作品タイトル等は『 』を用いる。

それは1888年シュトルムが世を去るまで絶えることのなかった文通と交歓の始まりとなった。

他方この出会いは、もちろんシュミットをも大いに啓発することになった。彼は早速にもキーワードによる、表現は簡潔ではあるが、非常に詳細、かつ多面的な興味深い情報を凝縮した『覚書き』を認めている。これは最近まで学会でも未知のものであったが、ラーゲ編の『シュトルム・シュミット往復書簡集』(SS,I,15-19)で初めて公開された。三年後にシュミットが発表する『シュトルム論』Theodor Stormは恐らくこのメモに基づいているが、それ以外にもシュトルムとその文学に関わる興味深い情報を伝えていて貴重である。この若き文学史家の『シュトルム論』は1880年に雑誌『ドイツ展望』Deutsche Rundschauに発表されたが、これに対するシュトルムの感想・訂正・反論は、そのシュミットへの書簡(SS,II,46-50)に読み取ることができる。

先述の往復書簡集には現存する全ての両者の書簡類が145通収録されているが、シュミットからのものは約三分の一、シュトルムの書簡は三分の二を占めている。これ以外に最後にシュトルムの妻、ドロテア夫人によるもの1通が収められている。ここにはシュトルムの作品の成立史、テーマ、構想などが語られ、また素材や構成、言語表現についての議論、変更や削除などの提案、そして文学論が展開されている。有名な公刊は中止されたが、シュトルムが自らのノヴェレ論を展開した『序文』に関しても、シュミットの意見に基づいて修正した経緯がうかがえる(SS,II,41-44)。

そもそもシュトルムは、その作品・創作に対する感想・批評には極めて関心が強く、それは彼の創作には不可欠のものでもあったから、この点からシュミットの批評・感想はシュトルムの創作に大きな影響を与えたことであろう。シュトルムが晩年の十年間、それまでも増して優れた作品を相次いで世に送り出したのも偶然ではないように思われる。

以下、シュミットが最初の出会いの直後に書き記したメモ——ここには様々なシュトルム及び、その文学に関する興味深い事実やエピソード、メッセージや証言が含まれている——を紹介し、それから発展、発表された『シュトルム論』を中心に、シュミットとシュトルムの間で交わされた論議の跡を辿ってみたい。そこからは当然、当時の代表的ゲルマニストによるシュトルム受容の一面をうかがうことができるが、とりわけシュトルム文学の特色を伝える様々な情報を読み取ることができ、いわばシュトルム文学へのコメンタールとして我われには有意義である。この意味で、原文の内容をできるだけ多く伝えるのが、本稿の意図でもある。

I シュミットのシュトルムに関する『覚書き』

シュミットのシュトルムについての『覚書き』は、ラーゲ(SS,I,125)によると1887年

3月20日ごろ、その最初の出会いの直後に記されたものようであり、一部はすでにシュトルム滞在中に書き留められていたと推察され、まだ記憶に新しい時期の記録という点で注目される。3ページにわたって細かく、びっしりと記されたメモの冒頭には、2月9日から3月4日の日付が付されている。これはシュトルムのヴェルツブルクでの滞在期間を示している。以下まずその概要を紹介するが、引用などの便宜のために各段落ごとにナンバーを付すが、これは原文にはない。

1. 中背で、少し前屈みで、五十九才、最初はややぎこちない感じ。豊かなグレイの髪と髭。美しく輝く青い目。優しい声、ゆったりとした話し方。鋭いシュレースヴィヒ式のS……

2. 息子ハンスのため来訪、二十学期の後医師試験を受けるという（飲酒癖）。

3. 間もなく多くの時間をともに過ごす。いくらか細かく、几帳面。親切で暖かい。本など贈られる。……『静かな音楽家』Ein stiller Musikantを朗読（末の息子に関係……）。シュトルムは声楽家、フーズムの合唱団指揮者。静かな柔らかい声で余りアクセントを付けないが、繊細で心を込めて朗読する。（いろいろ暮らしぶりなど……コードヴィエツキ²⁾を好む……）。

4. 『従兄弟クリスティアンの家で』Beim Vetter Christian、彼が体験したような古い家庭の生活の雰囲気。特定の体験はない。……シュレースヴィヒ・ホルシュタインで好まれる「ねえあんた」Mein alter Jungeという呼び掛け、特別の情をこめて読む、老カローリーネの場面ではしばしば笑って先へ進めず、厳粛に心を込めて「マルティエ・フロールス」（『随想集』Zerstreute Capitel 参照）dat es uns wull ga³⁾読む。エーネペーンのモデル実在。『随想集』の大要、協会の本今も所持、二人の甘党。

5. 特に『従兄弟クリスティアンの家で』、『水に沈む』Aquis submersus、『三色すみれ』Viola tricolor（この作品は二度目の結婚の全ての懸念を解消……）に対して自信をもっている。ドーに対する若々しい情熱について……別離の後の再会（「古いワインのようだ」）……などについて嬉しそうに語る。亡くなった夫人について大いに嘆く。彼女についての……詩を読んだ。『最愛のひとを葬るがいい』Begrabe nur dein Liebstesとか、荒野を越えて行き、足音が反響し、思い出が彼に衝撃を与える詩⁴⁾……しばし無言、手で顔をなでる、ため息、それからまた新しい話題や新しい詩。さらにシュトルム編纂の『ド

2) Chodowiecki, Daniel Nilolaus (1726-1801) 画家、銅版画家。『静かな音楽家』の主人公ヴァーレンティンのコードヴィエツキ好みはシュトルム自身のものでもあった。

3) この低地ドイツ語は後にシュトルムは訂正している。以下Ⅲの11、参照。正しくは

Up dat et uns wull ga up unse ole Dage. "Auf dass es uns wohl gehe auf unsern alten Tagen!" (LL, II, 797f.)

4) Über die Heide (1875) を指す。

イツ詩集』の改訂。ソリテール⁵⁾。レントツ Jakob Lenz。彼はレントツについて細部に至るまで通じていて、特に『兵士』の幾つかの場面を賞賛した……………。

6. シェッフエル Joseph von Scheffel の詩集。シュミットの『ミネザングの春』⁶⁾ 研究シュトルムを魅了。ゲーテの詩『日記』。シュトルムも同じような詩。全体として情熱的。暖かみのある、感性の強い性格。シュトルムの話ではユダヤ女にキスしたが、この女、後に落ちぶれて死ぬ(『ただ今日のみ』Heute, nur heute)。……………諦念(彼の大抵のノヴェレにこれがある、シュトルムこれを認める)は彼の愛にはない。……………共にサルドウの『アンドレア』⁷⁾の上演をみる。演ずるブスカ嬢は面白く、チャーミングで、スラヴ風のなまりの言葉が魅力的。シュトルム、この女は危険だという。二度と同行せず(『独身男』最近の俳優は演じられない、昔の劇団、特に『狩人』を素晴らしく演じたある女優のことを熱心に話す)。シュトルム帰ってイフラント⁸⁾の触りを朗読。

7. 『従兄弟クリスティアン』は『ガルテンラウベ』誌、ヴェスターマン断り、ローデンベルクの『サロン』誌に掲載。

8. 『水に沈む』(クルパ・パトリス)。『ドイツ展望』1876年。(ペーテルとローデンベルクは消極的)。故郷の教会に2枚の絵、牧師と睡蓮を手にした少年、その下に A. S. culpa servi。残酷な銘は深い印象を与える。2枚の絵の印象はまとめられる。他は自由な創作。擬古趣味ではなく、古風な調子の言葉、現代通じないようなものは無い。ブラウンシュヴァイクの職人との文通。A. S.には自信。

9. 『プシューヒェ』Psyche。女性の羞恥心をデリケートに取り扱うことに重点。官能的要素を慎重に利用。古代的、現代的モチーフを結合。ハイゼ Heyse の評……………。完全な誤解。シュトルム、ハイゼを評して、ユダヤ風の官能(彼を「短編小説 Novelle のメンデルスゾーン」と称す)。『世界の子供たち』……………。『樂園にて』……………でハイゼに書簡。

10. シュトルムはハイゼの『短編小説集』Novellenschatz を援助、ハイゼは『ドイツ詩集』に助言。ゴットシャル⁹⁾『ドイツ詩集』に対し酷評、ハイゼもゴットシャルの詩はすすめなかった。「小卓文学」Nipptischpoesie。

11. リンダウ¹⁰⁾、シエル¹¹⁾への批判。エーミール・クー¹²⁾との交友と文通。

5) Solitaire、本名 Woldemar Nürnberger(1818-1869)

6) Des Minnesange Frühling は初期のミネザング詞華集。

7) Sardou, Victorien(1831-1908)フランスの劇作家。Andrea は 1873 年初演のコメディ。

8) Iffland, August Wilhelm(1759-1814)ベルリン国立劇場監督、劇作家。

9) Gottschall, Rudolf von(1823-1909)作家・評論家・文学史家、Blätter für literarische Unterhaltung の編集主幹。

10) Lindau, Paul(1839-1919)作家、週刊誌 Die Gegenwart 刊行。Lindau, Rudolf(1829-1910)作家で外交官。前者の兄。

11) Scherr, Johannes(1817-1886)詩人で文学史家。

12. 『みずうみ』Immenseeの『母さんがそれを望んだのです』Meine Mutter hat's gewollt 民謡調をうまく表していることを望む。最初「甘美に感じられたものが、罪となっていました」、前行、民謡らしくないので「そうでなければ名誉であったものが」に変更。

13. 抒情詩に誇り。小曲。内面的。簡素。「簡素さ」Simplicitätという言葉は何度も聞く。ダーン¹³⁾の詩集を検討。『ドイツ詩集』のために一編選ぶ。特に好むのはクラウディウス Claudius、ドロステ Droste-Hülshoff、アイヒェンドルフ Eichendorff、メーリケ Mörike (『Mの思い出』ヴェスターマンから1876年頃)とは個人的に親しい。出版されたばかりの『画家ノルテン』借用。

14. 詩人を知ったのは青年期。フーズムのギムナジウムではシラーとケルナー-Körnerなど、ゲーテは未見。最後はリュウベックで学ぶ。射撃祭で部屋仲間がゲーテの『ファウスト』獲得。貧り読む、ツルゲーネフ Turgenjew の短編におけるような効果。強い影響を受けたのはメーリケ、アイヒェンドルフ、シュティフター-Stifter(少なくともシュティフターとはかなりの類似点を感じず……。『独身男』を高く評価。ホフマン Hoffmann を読み深い印象を受ける。

15. ファウスト人形劇に夢中。

16. ダーンの『ローマ攻略戦』¹⁴⁾、エーバース¹⁵⁾、フライターク Freytag を完全に非難。

17. 二度講義に出席、『ミス・サラ・サムプソン』と『エミーリア・ガロッチィ』(オルジーナや修道僧は本当に詩的にとらえられている人物という)。

18. シュトルムの詩『猫のこと』Von Katzen を朗読。シュトルムそれに対しポツダムでの経験を語る。有名になり初めの頃お茶会に招かれ、朗読を求められたが、この詩を読んだら、皆、憤激して沈黙、それ以上読まされなかった由。

19. 少し高慢な枢密顧問官夫人からの来信、全て前と変わらないことを願います。シュトルムの返信、突然お宅に飛び込んできた栄誉は、しかし普通の称号・栄誉の階段をゆっくり上っていく人たちを誇らしく見下ろせるものではありません。

20. 『ドイツ展望』1877年2月、ハイゼのソネット『十二人の詩人のプロフィール』。シュトルムは余り喜んでいない。ハイゼは自分の内にもあるような特色のみ取り上げていると。ケラー-Keller はハイゼのことを「短編小説のシェークスピア」と称する。シュトルム原則的に賛成。ケラーと親交。しかしケラーは素材に、より冷静に立ち向かっているように思われるという。ツルゲーネフ、ガルシア Viardot-Garcia とも交際。

12) Kuh, Emil(1828-1876)オーストリアの作家・文学史家。

13) Dahn, Felix(1834-1912)歴史家、法律家、詩人。

14) Ein Kampf um Rom は1876年発表の長編小説。

15) Ebers, Georg Moritz(1837-1898)ライプツィヒ大学エジプト学教授、小説家。

21. 1877年『現代』Gegenwart誌掲載イェンゼン¹⁶⁾のシュトルム論。(このような論文をシュトルム大変喜ぶ。少し自惚れ eingebildet、しかし不快ではない。)シュトルムはイェンゼンを高く評価、ただし冗長すぎると。

22. ガイベル Geibel、グロート Groth と親しい。『クヴィクホルン』の詩を多数朗読、新しい深い印象受ける。「そうだよ、抒情詩は聞かなくてはね。」

23. グロートとマクス・ミュラー¹⁷⁾、フーズム訪問。ミュラーの乾杯の辞「二人の詩人、そして一人の詩人の子」。

24. キール大学時代。意気地無しではなかった。プリューム¹⁸⁾の問い「いつも真面目に暮らしたか」。シュトルム大声で「否」。モムゼン兄弟¹⁹⁾との友情。テーオドルの大きい影響、大いに励まされる。すなわち気迫のこもった、厳しい批判——共にダンテ、シェークスピアを読む、しばしば真夜中まで。その後 Th.M.なお勉学。『三人の友の歌集』Lieder(buch) dreier Freunde いくつかの詩は共作、シュトルムが書き始め、テューヒョが後を続ける。抒情詩人テーオドル・モンゼンは初耳。いくつかは素晴らしいとシュトルムいい、一つを朗読(「青い目」...Augen blauen で始まる詩)。

25. 宗教的にはまったく自由。政治的にも。デンマーク支配の様子。(ただホルベルク²⁰⁾のみ好んでデンマーク語で読む)。家族と亡命。深い家庭感覚。クリスマスツリーを飾れない話の短編。夫人や子供のことを話すのが好き。

26. 原稿、手紙などの送付に苦情(ウーラント Uhland の寛容さはない。拙劣な詩人を嫌う。紋切型美辞麗句の詩人がはびこっていることを嘆く。簡素な抒情詩への理解は非常に希)。しつこくサインを求められる。

27. 無遠慮なユーモアも。(アイヒロット²¹⁾の刺激で)昆虫の歌「朝のノミ」、「夜のノミ」を書く——「ニップティッシュ」はばかげた表現。少しも上品ぶったところがない、もちろん官能的、反キリスト教的などを気取ってもいない。

28. ボーデンシュテット²²⁾に反対、箴言的なもののみ認める。他にはダウマー²³⁾を評価。

以上であるが少し補足を加えると、最初に記されている発音の特色は後に so,sanft の例

16) Jensen,Wilhelm(1837-1911)は当時愛読された作家。その『シュトルム論』は1877年『現代』に掲載された。

17) Müller,Max(1823-1900)言語学者。オクスフォード大学教授。詩人 Wilhelm Müller の息子。

18) Prym,Friedrich(1842-1915)ヴェルツブルク大学・数学教授。シュトルムのヴェルツブルク滞在中、親交。

19) 兄 Mommsen,Theodor(1817-1903)は歴史学者、ベルリン大学教授、弟 Tycho(1819-1900)は古典学者。

20) Holberg,Ludvig(1684-1754)ノルウェー・デンマークの詩人、歴史家。

21) Eichrodt,Ludwig(1827-1892)本名 Rodt,Rudolf 詩人。風刺的な詩、ユーモア詩を書く。

22) Bodenstedt,Friedrich von(1819-1892)詩人。

が示されているので、恐らくははっきりとした北ドイツの有声のsを指していると思われる。ヴュルツブルク訪問の本来の目的については先述の通りである。次いで『静かな音楽家』の成立についての息子カルルとの関連がメモされている。朗読については師のシェラー²⁴⁾宛の書簡でも「彼の作品の常にいくらか哀調を帯びた基調に恐らく適した低い声で控え目に」読んだと報告している。「マルティエ・フロールス」は『ハリヒ行』Eine Halligfahrt、『シュターツホーフにて』Auf dem Staatshofにも引用されている低地ドイツ語の乾杯の辞。なお『ハリヒ行』は最初『随想集』の一編として発表された。「協会の本」はシュトルムが所有していた古書で『今と昔』Von heut und ehemalsで言及されているもの。「二人の甘党」に関しては短い物語Zwei Kuchenesser der alten Zeitがある。「古いワイン……」はシュトルムの言葉がそのまま記録されているわけである。また「五月にここへ来たことがなければよかったのに。ああ人の命と愛—それは儂くも消え去っていった」という哀感をこめた詩『荒野を越えて』がコンスタンツェへの思いを歌ったものであることが伝えられている。ここにある『ドイツ詩集』はシュトルムが編纂し1870年に刊行したHausbuch aus deutschen Dichtern seit Claudiusのこと。当時第四版を準備中だったようである。ソリテールはシュトルムが高く評価していた詩人。レンツを詳しく読んでいたというのは興味深い情報である。(1, -5.)

中世ドイツのミンネザングがシュトルムの関心をひいているのは注目されよう。『遅咲きのばら』Späte Rosenや『ハデルスレフフースの祭り』Ein Fest auf Haderslevhuusを思い起こさせる。シュトルムの「同じような詩」はラーゲによると『神秘』Mysterium(LL, I,254; G,I,286)を指す。『みずうみ』に挿入されている酒場の女の場面は、シュトルムの体験に基づいているらしいという情報は恐らくここにしかない。「諦念」は後にシュミットの『シュトルム論』でも主要な概念となる。スラヴ系女性に対しシュトルムは特別な魅力を感じていた可能性がある。『水に沈む』についてのメモには誤記もあるが、このまま『シュトルム論』に取り入れられていて、後にシュトルムは訂正している。『短編小説集』(1871ff.)はハイゼとクンツKunzにより編纂の24巻からなるシリーズで、シュトルムも作品を提供したりして、いろいろ協力。『ドイツ詩集』に対するゴットシャルの酷評は有名、「小卓文学」はその評のなかの言葉による。(6, -10.)

『みずうみ』の主題を担う詩『エリーザベト』の改作についての経緯は注目すべきものであろう。『新全集』LL,I,767にはこの異同が注記されている。シュトルムが抒情詩に関して「簡素さ」を強調しているのはもっともなことであろう。好みの詩人が記されている。

23) Daumer, Georg Friedrich(1800-1875)宗教哲学者、詩人、翻訳家。ペルシアのハーフィスの詩集をシュトルムも所蔵していた。

24) Scherer, Wilhelm(1841-1886)はゲルマニストでベルリン大学教授。彼に宛た1877年2月14日付け書簡はSS,I,125に引用されている。

シュトルムの学生時代の文学体験の報告は大抵の伝記にみられるが、シュティフターとの比較やシュトルムの評、またホフマンの影響を聞き出しているのは興味深い。(11, -15.)

詩『猫のこと』についての逸話は愉快である。これについては趣は異なるがメーリケに関する逸話も知られている²⁵⁾。ある枢密顧問官夫人へのシュトルムの返信には彼らしい皮肉が読み取られる。ツルゲーネフをバーデン・バーデンに訪ねた経緯は全ての伝記作者の伝えるところ。そこで当時有名な女流歌手であったガルシアとも交歓。シュトルムも歌っている²⁶⁾。(16, -20.)

イェンゼンのシュトルム論がシュトルムを喜ばせたいが、後にシュミットの論文にも同様喜ぶ。グロートの低地ドイツ語の詩にシュミットが感銘を受けているのは注目される。シュトルムの言葉は抒情詩への彼の基本的態度とも関わっている。キールの学生時代についても大抵の伝記で知ることができよう。ここでシュトルムが披露したのはラーゲによると多分『若き愛』Junge Liebe (LL,I,126 ; G,I,217f.)で、『歌集』では『愛の気持ち』Liebeslaunen と題され、冒頭は Blau ist Ihr Aug' で始まる。シュトルムの宗教観・政治的態度については有名。ハイリゲンシュタット時代以降この傾向が強まった。デンマーク嫌いにもかかわらず、作家ホルベルクの作品を原語で読んだという記述は見落とせない。次いで話題となっている作品は短編『樅の木の下で』Unter dem Tannenbaum。(21, -25.)

原稿や来信が多くて嘆いているようであるが、これはシュトルムの人気の現れでもあると思われる。ウーラントはこういう雑事に寛大だったのであろうか。『昆虫の歌』はアイヒロットへの書簡に伝えられている詩で、『シュトルム協会誌』STSG 14 (1965) で初めて公刊、現在は全集(LL,I,272)に収録されている。ブラームスが好んで作曲したグウマーを評価しているのは頷けるであろう。(26, -28)

まとめれば、ここにはまずシュトルムの容貌や性格、態度、思想信条がメモされている。そしてシュトルムは——はっきりとはしないが出自や——故郷について、学生時代の回想、夫人や家族や暮らしについて、またいろいろな人びととの交わりについて語ったことがうかがえる。さらにヴェルツブルク滞在中の暮らしぶり、すなわち観劇やシュミットの講義への出席などの様子が記されている。しかし何といても二人の話題の中心は文学である。しばしば朗読——その様子についても語られている——を交えながら、シュトルムは、まず自作について、その素材や成立の経緯、批評・評判などを語り、さらに二人で様々な作家・詩人の作品を朗読したり論評を加えている。シュトルムの読書量にはシュミットも感心している様子もうかがえる。シュトルムが自分のどの作品に自信があったか、また好きな、あるいは評価していた作家、逆に批判していた作家や作品などがここに記されている。

25) STORM-MÖRIKE Briefwechsel, 27, 146

26) STORM, Gertrud II, 121f. u. a.

ハイゼなどについては必ずしも正確ではないが、こうしたリストからシュトルムの基本的な創作態度をうかがうこともできよう。なお凝縮された覚書きなので、分かりにくい部分もあるが、ラーゲはかなり詳細な注を付しているので参考になる (SS,I,126-137)。

II シュミットの『シュトルム論』

当時シュトラースブルク大学教授であったシュミットは恐らく前章の『覚書き』に基づき、雑誌『ドイツ展望』の24巻(1880)7月号に『シュトルム論』を発表した。これは、その31-56ページに掲載されたが、シュトルムの作品紹介・論評を中心に、その文学の特質を論じている。抒情詩を初め、初期の短編から『エーケンホーフ』Eekenhof (1879)に至る作品、またシュトルム編纂の『ドイツ詩集』が話題になっている。

まず以下にその概要を見ることにするが、全体は序の部分と3章の本文から成り立っている。以下便宜的に序は0.、以下各章に1.～3.のナンバー及び各段落のナンバーを付す。

0. ドイツ文学に「家庭の文学」die Poesie des Hauses の分野を開拓したのは十八世紀の功績。ルター以来この分野は進退を繰り返しながら次第に地位を固める。「家庭の文学」は「教訓的な談話、明るい社交的気分、心地好い音楽」などに彩られた、簡素な登場人物、モチーフによる「家庭の安らぎ」を賞賛する文学。クロップシュトック Klopstock の『チューリヒ湖』Zürcher See、ゲーテの『ヴェルテル』Werther、クラウディウス、イフランドの作品などはこのような文学。音楽家は家庭向きの楽しい歌を作曲、また挿絵画家コドヴィエツキはこうした場面を写しとっている。このような歴史的前提はシュトルム文学の本質的な内容に関連する。

南北ドイツを比較すると、北ドイツではかなりの文学的功績は家庭生活にも負っているところがある。シュトルムはシュレースヴィヒ・ホルシュタインの小都フーズムの生まれ、そこの旧家の出。北ドイツの家では速やかな変化はなく、息の長い世代が緩やかに次の世代に交代して行く。古い伝統は受け継がれ、……世代から世代へと経験が語り伝えられ、……いろいろな話しも消え去ることはない。強い家庭感情と固い友情が絶えず最善の意味での快適な一体感を生み出す。古い家には、崇敬、誠実、細やかなものへの敬虔さがみなぎり、そこには先祖伝来の家財と新しい品物が平和に共存し、静かに見つめる人の心に消え去った昔の響きや姿を呼び覚ましてくれる。「古代研究家が文書、発掘、類推などで古いアレマンの民家を復元するように、シュトルムの作品から私は忠実にシュトルムの家を思い浮かべることができる、あの〈ペーゼル〉もどこにあるかちゃんと分かる。特徴ある保守的な種族の風土に育ち、価値ある言葉に言語能力を培われた詩人は幸いである。」

1. 1. 詩人は『みずうみ』によって知られるようになったが、今もそれは最も有名な作品。しかし、シュトルムを一面的に判断しないためには『水に沈む』にいたる進展を見なくてはならない。初期の作品の多くは諦念文学 Resignationspoesie と称することができよう。『みずうみ』、小さなデリケートなモチーフが未来を暗示、現実的な母は娘の将来をエーリヒの手に委ねる。ラインハルトは穏やかなヴェルター、エーリヒはアルベルトにたとえられる。しかしエリーザベットの頬はロッテほど血色がよくない。

1. 2. ラインハルト、友人の館でエリーザベトに再会、描写は簡潔なだけに心を打つ、シュトルムには暗示的に気分を醸し出す才能あり。エリーザベトの手は無言のうちに語る。「彼は、夜ごとに病める心のうえにおかれた、美しい婦人の手をとらえる密かな苦悩の跡を見た。」このような表現が多い。自然は暗示を促す。ラインハルトが睡蓮に泳ぎ着こうとするが、水藻に絡まれるロマンティックな夜のシーンは美しく象徴的である。またラインハルトが「原始の調べ」に耳を傾けて、どこかで採録した民謡「母さんがそれを望んだのです」も、状況を残酷なまであからさまに意識させてくれる。

1. 3. 最初はシュトルムはラインハルトを結婚させている。初稿では、彼は後にしっかりとした婦人と結婚、しかし生まれた息子は夭折、夫人は三十年後に亡くなる。孤独となった彼は、夕べの黄昏のなかに浮かび上がった睡蓮をじっと見るのである。ここが全面的に削除された。他の改稿部分もより芸術的になった。クリスマスイヴの美しいシーンも学生気分で作られていて、優れて情熱的な「ただ今日だけ、私は美しい」は歌われていなかった。シュトルムは最初民謡風の歌で「甘美に感じられたものが、罪となってしまう」と嘆かせたが、前半が民謡風ではないので、より穏やかな当たり前の「前には誇りだったものが」と変更された。

1. 4. オットー・ルートヴィヒ Ludwig, Otto の『天と地の間』のアポローニウスやシュティフターの『独身男』とラインハルトを比べると、前者は全く問題が異なるし、後者の主人公は渋い人間嫌いの性格で違う。シュトルムとシュティフターはお互いに似ているが、シュトルムは非真実や、みせかけや、退屈でつまらないことを書かない。単に描写的な文学は彼の理想ではない。

1. 5. 彼にとって重要なのは、芸術的にまとまった、一つのコンフリクトに基づくノヴェレに深い情緒の内容を与えることである。民謡の二人の王子たちのように恋人たちは手を広げて立っている。彼等を分け隔てる水は深い。「やっぱりだめだよ、勇気が無いんだから。」一緒になることを諦め、逞しい抵抗力もなく、運命の固い拳のなかの柔らかい蠟のように、ただ夢のうちに時が過ぎる。しかし全ては気分の文学に浸されている。諦念小説の終末には幸福・不幸の強い響きはない。微かな響きが徐々に脹らみ、またゆっくりと静まって行く。シュトルムは明らかに詩的な理念によってもたらされないような全ての異質の要素を持ち込まないように心掛けています。『荒野の村で』Draussen im Heidedorf では職務活動か

らの刺激が認められるが、この村物語 *Dorfgeschichte* は犯罪例集と文学の狭間を彷徨う不快な犯罪小説ではない。ごく僅かの愛国、敵愾心の表現も全く特定傾向をもつものではない。1863年には外国人として故郷への思いを、美しい家庭物語『樅の木の下で』で感動的に描いた。

1. 6. 彼は分裂・葛藤を好むが、作品では厳しいもの、強大なものを避けている。

彼の描く人物の諦念は、痛みを与えつつ同時に鎮痛剤の小瓶を差し出しつつ、哀調を帯びた回顧の甘美な喜びを告げている。シュトルムは感動させようとするが、衝撃を与えようとはしない。

1. 7. 別離と回避の古い歌が豊かなヴァリエーションで響いている。ラインハルトとエリーザベトは外的原因で別れる。『アンゲリーカ』*Angelika* では性格が問題。『広場のほとり』*Drüben am Markt* のドクトルは市長の美しい娘にふられる。恨むこともなく、その掛かりつけの医師になるが、古い診療メモを見ながら過ぎ去った昔を想い出す。静かな敬いの気持ちのユーモアがこの老医師にある。彼は我われを微笑ませるが、笑わせはしない。シュトルムはまた楽しい調子を響かせることもできるが、それは『林檎の熟するころ』*Wenn die Äpfel reif sind* によって分かる。『ハリヒ行』の老人は豊かな点景を除けばシュティフターの『独身男』を思い起こさせる。シュトルムは語らないことによって効果を出し、普通は明るい、しばしばざらざらした日の光のもとにさらされることを、黄昏の光のなかで暗示する芸術の大家である。これはこれから述べる回想のテクニクとも関係がある。青春の愛は大抵のノヴェレのなかで開花している。

1. 8. 「青春の昔の、青春の昔の歌が、いつも響いてくる。」そして「聖ユルゲン」の塔の周りには燕がさえずる。それはこのノヴェレのコーラス、これに対しシュトルムは素晴らしい芸術作品を書いた。終りは「帰ってきたときは、全ては空だった。』『聖ユルゲンにて』*In St. Jürgen* はシュトルムの傑作である。七十才の老女の報ずる素材資料。ある職人が美しい慎み深い乙女と婚約、父の意向に従い、しきたりにより修業の旅に出る。ドレーステンでのっぴきならない事情で止まり、婚約者のもとに帰れなくなる。親方が死ぬとき夫人と子供の世話を頼んだからであった。そのうち未亡人と結婚する羽目になる。しかし故郷の婚約者が脳裏を離れない。五十一年後ついに彼女に再会したく、密かに旅立つ。しかしなにもそこにはなかった。シュトルムはこの素材を駆使。ハレの別離にも後見人の破産という動機が与えられる。ハレはそっと逃げ出すのではなく全てを告白し、彼の伴侶も和解の旅を勧める。青春時代の婚約者アグネスもずっと前に死んでしまったのではなく、彼の到着の直前に死ぬのである。

1. 9. この物語は美しい敬虔を描いている。そしてハンゼン以外にも、一連の素晴らしい人びとが作品に登場するが、良き昔の人びとを生き生きと写し出すシュトルムの天分を示している。『片田舎にて』*Abseits* にはよく似た運命のヴィーブ²⁷⁾、シュターツホフの老

27) シュミットは主人公の名前を間違えている。正しくはメータ *Meta*。

夫妻、町の子供たちも尊敬していた低地ドイツ語の語り手のレーナ・ヴィーフ²⁸⁾など。威厳のある老婦人、低い身分の婦人たち、学校の先生、村のヴァイオリニスト、傲慢な若い農民。全ての古いテーマはシュトルムの下では新しい形を取る。シュトルムの『館にて』Im Schloss は彼の特別な小説技法の円熟であり、またこの種の題材を扱ったものでは最も優れていると思う。筋も性格描写も円熟。『大学時代』Auf der Universität の悲劇的結末にも和解が含まれている。堅実な建具職人、滑稽な仕立屋、見捨てられた少女、ドン・ファンのラウ伯、お針子、特別新しい素材ではないがダンス練習は傑作。彼女が知り好むものを、このドイツ的情绪の作品 diese deutsch-gemütliche Dichtung は描いている。『従兄弟クリスティアンの家で』の少女が「どうぞ、おさしつかえなければ」ときさやくようにいうとき、伯父が「クリスティアン、ねえ君」と呼び掛けるとき、またエーネベーンが「マルティエ・フロールス」の乾杯の辞を唱えるとき心が晴れ晴れするであろう。要するにここでは家庭の文学が凱歌を挙げている。

1. 10. それはまた詩人が外国で樅の木の下での生活の一こまを繰りひろげるときにも同様である。古いロココ時代が蘇ってくる。詩人は先祖と共に古き良き時代を生きながら、この時代に通じている。同様彼の初期の作品にはこの時代が豊かに描かれている。『広間にて』Im Saal では我われは十八世紀の世界に導かれる。沢山のものが代わったが、基本的には同じままである。しかし規律は厳しかった。『日の光のなかで』Im Sonnenschein で、商人の娘は愛を諦めなくてはならなかった。フレンツヒェンは魅力的なロココ女性。古風な気取りなしに昔の人びとを描き出すこの才能は、多数の作品に描かれている過去崇拜には相応しい。「緑の糸杉よ、世は全く楽しげだが、全ては忘れ去られる」と学生時代にシュトルムは友人の三行詩を受けて結んだ。この言葉は彼には通じない。彼のミューズの女神は忘れっぽくはない。追憶の永遠のランプを守る司祭である。

1. 11. 敬虔さは住居の細々とした描写にも現れている。

1. 12. 部屋から庭園、庭園から荒野、海へ向かう。フーズムの風景の美しさは特別優れたものではない。しかしこの地方にも孤独な巡礼者が感じる密かな魅力がある。広大な風景、不思議に足音が反響する荒野、聖なる海。シュトルムは自然のなかの安息日の静けさを好む。ヘッベル Hebbel のぞっとするような荒野の記述、グロートの不思議な荒野の描写を知らぬものはあるまい。シュトルムの作品の人物は、孤独の甘く不気味な感情を味わうために荒野を求める。夢見心地で草のなかに寝そべり、空を見上げ、それから遠方に疲れた目を近くに向けるのは、全てのシュトルムの散策者の心からの楽しみである。ここにも近きもの、細やかなるものへの敬虔さがある。

1. 13. 森の孤独 Waldeinsamkeit もシュトルムでは類似の効果を及ぼす。怪しげな戦慄

28) レーナ・ヴィース Lena Wies が正しい。

ではなく、厳かな、夢のような、いくらか不安な静けさが彼をとらえる。

1. 14. 薔薇やライラックの香りが暖かい夏風にのって部屋に運ばれ、外では月夜の声、草のそよぎ、微かな歌が響く。

2. 1. シュトルムの芸術はまた我われを夕べの一時、また人生の黄昏へと導く。彼の文学は鮮やかな豊かな回想に満ちていて、到達した最後の目的地から振り返りつつ、これまで通ってきた道に光を投げ掛けることを好む。こうして激しい苦しみは和らげられ、除かれる。『みずうみ』の構想は典型的である。この時間的な不連続の進行は、シュトルムの作品のほとんど全てに見られる。『従兄弟クリスティアンの家で』のように初めから終りまで叙事的に進行する物語は希。終末部は整理の意味のエピローグ、諦念の状況描写、あるいは好意的なハッピーエンドとなる。シュトルムは対話の利用については極端に控え目。短い導入のやりとりの後で、一方が比較的長い報告を行い他方が聞いているというケースを除けば、本当の対話は希にしか見られない。シュピールハーゲン Spielhagen のような会話は例外としても、ケラーやハイゼのような論議、対話はシュトルムでは、どこにもみられるのだろうか。せいぜい『画家の作品』Eine Malerarbeit に何人かの表現の形で含まれているくらいである。確かに長編小説を書こうと考えたことのないシュトルムには、まぎれもなくそのように限定する芸術的理由があった。しかし演説、講演、エッセイなどを持ち込まないように努力しすぎているのではないかという点については議論の余地があろう。最初登場人物の言葉による気分表現も非常に簡潔であった。あのささやくような「エリーザベト」、重要な場面を見てただ一言「インメンゼー」、「長いこと会わなかったね」Wir haben uns lange nicht gesehen.—「そうだね」Lange nicht.、「もういらっしやらないのでしょうか」—「二度とは」Nie で十分らしい。しかし注意深い読者はともに響く無数の調べを聞き取るのである。

2. 2. 非常に多様なメールヒェンはそれぞれ異なっている。『小さなヘーヴェルマン』Der kleine Häwelmann はおどけた真面目さをもつアンデルセン風の子供の物語。『ヒンツェルマイアー』Hinzlmeier は年長の子供向けの考えさせる物語。メールヒェンでも幸福の追求は必ずしも成功しない、この結末は哀調を帯びた諦念である。しかし童話の力が助けとなることもある。清純な乙女は『雨姫』Die Regentrude を目覚めさせる。シュトルムはここで現実的な村の物語の問題と、理想的な童話の世界を結び付ける困難な課題を解決している。『ツェプリアーヌスの鏡』Das Spiegel des Zyprianus では魔術はただ独特な薬味で、霧が晴れば全ては本質的には変わることはない。一族の伝統、城の伝説が基本となっている。なお、ここには後の『水に沈む』などの貴族描写のさきがけが見られる。他の作品、特に『ブーレマンの家』Bulemanns Haus ではホフマンのカロの流儀の影響がはっきりと見られる。そこでは高利貸しの息子が親戚の女に呪われ、萎びた小人の幽霊になってしまう。おかしくなった『左隣りの家』Im Nachbarhause links の老女もホフマンの魔法のラ

ンプの光に照らされる。変わり者の取扱いにシュトルムは素晴らしく巧みである。

2. 3. シュトルムの芸術的関心は偏ったものではなく、新旧の作品の様々な潮流を熱心に吟味している。ツルゲーネフ、ケラー、ハイゼと親交。ゲーテ、アイヒェンドルフ、メーリケ。彼は登場人物の性格を、またよくその好みの作家で表す。マルテにとっては『画家ノルテン』の人物は生きた人びとになる。しかしこの良き老婦人は、この悲しい物語の不安な予感を伴う暗い力の関連に気付いたかどうか。後にシュトルムは晴れやかな気分でメーリケの牧師館を訪れる。すでに大学時代に彼と仲間はメーリケを宣伝している。『三人の友の歌集』Liederbuch dreier Freundeはつつまじやかな蕾であるが、間もなく開く花の香りが感じられる。

2. 4. 読者はシュトルムを抒情詩人としてよりも小説家とみなしているように思われる。

2. 5. 我われはゲーテ以来、抒情詩人には感情豊かな心を期待する。シュトルムのリートは自由な告白を目指す深い感情から湧き起こってきた体験詩であり、詩人は体験しなかったことは歌っていない。それは詩人の人生の証しである。第一級の抒情詩人シュトルムは全てのレトリックと一時的な流行の文学には無縁である。

2. 6. 多くの短編作品の短調は抒情詩でも支配的である。しかしその響きは多様。

2. 7. 彼の愛の歌はあらゆるニュアンスを響かせる。諦めの竖琴が響くのは希。密かな努力、幸運な出会い、幸福な結婚が、様々な心の喜びと苦しみの響きとともに描かれている。多くの詩節が必要になるのは希である。彼は僅かの言葉で豊かに表現する、真の抒情詩を創造する力を持っていた。

2. 8. 祝日、とりわけクリスマスが歌われた。季節の変化も自然感情に浸された抒情詩の装いを新たにした。甘美な無為、自然のなかでの孤独、森の様子、激しい自然の猛威、庭の霊などが細やかな情緒の詩で、また思い切った構成の、しかし細部にも美しく配慮したやや長めの詩で再現される。

2. 9. 辛く悲しい詩、また激昂の詩もある。ここでは譲歩や諦念はない。また瞑想 Sinnigkeitはシュトルムの文学の際だった特色の一つである。メーリケも静かに瞑想することを心得ているが、ユーモラスな血脈も流れている。メーリケの『古い風見鶏』²⁹⁾と比べられるようなものはシュトルムにはないが、『ニーナの埋葬』の物語³⁰⁾とか、詩『猫のこと』を知る人は、シュトルムのユーモアを否定することはできない。彼は哀愁の詩人ではなく、多才な詩人である。政治的には自立、宗教的には自由、彼は全く厳しい言葉も吐くが、短い箴言詩では「黄金の厳しさ」gold'ne Rücklosigkeitを勧める人生訓³¹⁾を書き記した。

2. 10. シュトルムは『ドイツ詩集』も編纂している。シュトルムは単なる思い付きや戯

29) 詩 Der alte Turmhahn は 1840 年作。MÖRIKE,II,786ff.参照。

30) Von Kindern und Katzen,und wie sie Nine begruben(LL,IV,225ff.;G,IV,450ff.)のこと。

31) 『息子のために』 Für meine Söhne(LL,I,66f.;G,165f.)

れの詩を除外、また華麗な歌も排除したが、目立たない慎ましやかな、豊かな人生の心のこもった詩は注意深く取り入れた。この詩集は収録された詩によってばかりでなく、洩れた詩によっても興味深い。美的な作品とならんで、独特な性格の非美的な詩も収録。

2. 11. この詩集がシュトルム自身の作品と同様、真の市民家庭の宝となるように。

シュトルムは北ドイツで人気があるが、オーストリアでも少なからず注目されている。しかし彼はとりわけ、この『ドイツ展望』の詩人であり、その作品は小説芸術の最高峰であると同時に、本誌の誇りでもある。

3. 1. 彼の小説芸術はさらに発展する。心理的な問題を取り上げた最初の試みは『遅咲きの薔薇』である。夫婦問題は『ヴェローニカ』Veronika でより明確に発展。『海の彼方より』Von Jenseit des Meeres は不釣合の結婚による混乱を描く。これはドイツを越えた舞台を描くシュトルム唯一の作品。

3. 2. 結婚物語『三色すみれ』は『水に沈む』同様の傑作。全体的にも、細部も生活に基づく典型的作品。

3. 3. 『静かな音楽家』はグリルパルツァーの『哀れな音楽家』のように感動的。しかし、いろいろな希望は裏切られるが、弟子でもある恋人の娘がコンサートで彼の「ひばりの歌」を歌い、彼を称えるという美化によって、より喜ばしく、より豊かで明るい。ジムロック³²⁾によるファウストの記述と、ガイセルブレヒトのひどく厳格な性格は大変巧みに表現されている(『人形つかいのポーレ』Pole Poppenspüler)。

3. 4. 『森と水の遊園』Zur Wald- und Wasserfreude では芸術的な放浪生活を期待するが、そうは展開しない。『管財人カルステン』Carsten Curator は厳しい無慈悲さが特色。名誉ある家が墮落した子供の軽薄さのせいで没落する。シュトルムはこの軽率さが宿命的な結婚によって持ち込まれ、その息子を犠牲とする様を見事に動機付けている。風変わりな家族のシルエットからは善意の霊気が、ユリアーネの像からはデモニーッシュな破壊的な霊気が感じられる。全体は恐ろしく厳粛である。このノヴェレには、残酷で惨憺たる力がこもっている。この詩人は銀のクレヨンばかりでなく、固い鉄筆も用いる。一般に1873年来、初期の優れた、有望な展望の作品群からは予想できないような多様さが展開される。登場人物は、より多くを求め、よりエネルギーに行動する。新しい素材が取り上げられる。

3. 5. 『森のかたすみ』Waldwinkel の独身男と不忠実な女は情熱的で官能的、謎に満ちた淫欲な雰囲気ятаだよう。しかしシュトルムは、明らかに官能的な処理を必要とするようなテーマに、潜在的な官能性と魅力的な少女らしい恥じらいを与えている。

3. 6. 本誌は最近シュトルムの最新の作品を掲載したが、これは十七世紀を舞台とし、

32) ラーゲ(SS,I,134)によると Simrock, Karl: Dr. Johannes Faust, Puppenspiel in 4 Aufzügen. Frankfurt/M. 1846 を指す。Simrock(1802-1876)はゲルマニストで作家。

古風なトーンで語られる『水に沈む』、『レナーテ』Renate、『エーケンホーフ』などである。『レナーテ』ではシュトルムは魅力的だが危険な素材を、時代の変更、地方色、風景、物語的モチーフ、魔術の解明、魔女の迫害と若い聖職者の弁護、主人公の心のコンフリクトなどを織り込み、驚くべき巧みさで処理している。

3. 7. この作品の全ての長所は、シュトルムの素晴らしい作品『水に沈む（父の罪により）』に、より高度に現れる。「下男の罪により水に沈む」³³⁾という残酷な銘をシュトルムはある村の教会の死んだ少年の肖像画で読んだ。この絵の隣には聖職者の肖像があった。彼の想像により直ぐに2枚の絵は結びつけられた。下男の代わりに画家である父が浮かび上がり、次々とモチーフが加わり、言い難く悲しい物語の構想ができあがった。動機付けは稀にみる確実さと伸びやかさを示している。ただ愚かな気取りだけを損なうような官能性、またどうにも逃れられない状況、そして夫妻の責任のみが耐えることのできる深い苦痛の気分で満たされている。

3. 8. 導入部及び物語の中心部で絵が巧みに用いられているが、これはシュトルム自身によるものである。少し例を挙げると彼は『館にて』では先祖の絵と身代わり少年の絵、また『三色すみれ』や『管財人カルステン』では亡くなった妻の肖像を用いている。また『画家の作品』では2枚の絵の気分を生き生きと描き出している。

3. 9. シュトルムは『水に沈む』で新しいスタイルを見出した。現代の詩人が古い時代に遡り、言葉にも昔の色彩を与えようと思うなら、専門家や素人が不快と思うような事柄を避けなくてはならない。他方特徴や言葉は現今のものから逸れ過ぎてもいけない。『水に沈む』と『エーケンホーフ』は新しい傑作であろう。

3. 10. グロテスクなものと好ましいものが共存する最後の短編を論評するのは差し控えておく。

3. 11. このような作品は、詩人の創作力が衰えず、その文学は古いワインのように、ますます高い香りをはなち、喜ばしいことに彼自身にとっては慰めと励ましとなることを保証している。愛する「海辺の灰色の町」を後に、美しい風景のなかに新居を設けた今もなお、これまで彼の文学を呼び覚まし、培ってきたものが失われないように。

以上である。まず「家庭の文学」が賛美されているが、『ヴェルター』などが例とされるから、これは広く十九世紀市民文学の流れでとらえられるべき傾向を指すものであろう。しかし多分に啓蒙思潮やビーダーマイアの雰囲気を感じさせる。シュトルム文学は、ここでは哀調を帯びた諦念の文学とされ、その短調の響き、甘美な豊かな回想、美しい敬虔さ、暗示的な描写、感傷的な感動性、ロココ趣味、瞑想の文学がその特色として注目されている。

33) *Aquis submersus culpa servi* は間違った引用であるが、これはメモ(8.)によっている。シュトルムの訂正については、以下IIIの23. 参照。

る。また僅かの言葉で豊かな感情を歌い上げる第一級の抒情詩人として賞賛されている。短編作品では特に『聖ユルゲンにて』は賞賛され、『大学時代』はドイツの情緒の作品、また『クリスティアン』は家庭文学の傑作とされている。さらに『静かな音楽家』、『水に沈む』、『三色すみれ』が評価されている。なお作品の資料・成立・改作などの経緯にもかなり詳細に触れているが、ヴェルツブルクでのシュトルムとの語り、またその後の往復書簡での意見交換が下地になっているものであろう。

III シュトルムのコメント

シュミットはもちろんシュトルムに、この論文の別刷を贈呈している。1880年6月26日付けで「全く内密に書いたものですが、ここにお送りする論文を受け取られて驚かれることでしょう、しかしどうか立腹されませんように。……これは私の正直な信仰告白だと思っして下さい。私は貴方の心情を再現するように努力しました、また貴方の言葉を使いました」(SS,II,17f.)という書き出しの書簡を添えている。個人的に親しい関係にあったのでこの様な論文を刊行するにはいろいろの配慮も必要であったろう。

ところでシュトルムはすでにそれより前に『ドイツ展望』の7月号を入手していて、早速同じ1880年6月26日付けでシュミットに宛て「思いがけず『ドイツ展望』最新号が届きびっくりしました。『エーリヒ・シュミットのシュトルム論』が載っていたのです。昼寝をしないで熱心に読みました。多大の好意と暖かい批評は感涙を催させました。……貴方の論文で私の文学の多様性が初めて正しく評価されました。貴方は〈シュトルムは感動させようとするが、衝撃を与えようとはしない〉³⁴⁾と書いています。そうですね、ひょっとしたら〈衝撃を与えることはできない〉という方が正しかったかも知れません。……(『水に沈む』、『管財人カルステン』)などでは私は感動させようとは思いませんでした。……ともかくも私の芸術的信条は、悲劇的なヴェレは……悲劇同様衝撃を与えるべきで単に感動させるべきではないということです。もちろん諦念は大いに感動と関連します。そしてもちろん私の作品の大半は諦念に帰せられますが……」(SS,II,16f.)と書き送っている。このような評論がシュトルムを喜ばせた様子、そして早くも rühren/erschüttern については異議を唱えているのがうかがえる。またシュミットの「諦念文学」という評価をシュトルムも認めているようである。

シュトルムは二日後にシュミットの書簡と別刷を落手している。その後、先述の『序文』についての意見交換が行われるが、やがてシュトルムは翌年9月、折りに触れ書き記した26項目に及ぶ詳細なメモを送った(SS,II,46-50)。短い訂正・補足も含まれるが比較的詳し

34) シュミットの『シュトルム論』の1. 6. また以下26. を参照。

い補足、批評、反論も見られる。以下 I、II 章と対照しながらこのメモを紹介する。

1. 原文 32/33 ページ (0.)³⁵⁾の「ドイツの家庭文学」について。ゲルヴィーヌス³⁶⁾の「文学はすべて、最近は大きな公的対象に代って、狭い社会や個人的生活のささやかな対象を描いている。文学史はこの分野に関心がない」という記述を引用、シュミットがこの分野を取り上げたことに注目。しかし彼のいう作家たちは、些細な物しか見ていないが、それはその対象のせいではなく作家のせいだと批判、「人の生きる所には文学があります。〈正しい言葉を言い当てさえすればいいのです〉。〈家〉は国家の基礎ですし、全国民生活のスペクトルが見られます。ゲルヴィーヌスの高度な観点の素晴らしい省察にも、ときには軽いおしゃべりもあります」と続けている。〈正しい言葉云々〉のアイヒェンドルフの詩行の引用は興味深い。個々の人生すべての奥底には文学が潜んでいて、詩人はそれを描かなくてはならないということであろうか。シュトルム文学の本質に触れている言葉である。
2. シュトルムの出自について、フーズムの旧家は「母方の」家であると補足。これは後に『文学論集』³⁷⁾に収録されたときには改められている。
3. 「〈ペーゼル〉 Pesel は曾祖母の家にしかありません。」これは当地方特有の部屋でシュトルムの『白馬の騎手』Der Schimmelreiter に付した南ドイツの読者のための注——シュミットなどの勧めによる——では「特別の機会のための部屋、沃湿原地方では通常居間に隣接」(G,IV,664;LL,II,756)とある。ペーゼルは『みずうみ』冒頭にも登場するが、シュミットにとっても珍しいローカルな概念。
4. 『みずうみ』の詩「母さんが望んだのです」(原文 35 ページ、1. 2.) は民謡ではなく、民謡風に作詩したものであることを断っている。シュミットもそう思っていた可能性はあるが、「どこかで採録した」という表現を念のため修正したのである。また初稿についての論評 (1. 3.) に感謝している。これについてはシュトルムがヴェルツブルク滞在中に伝えたもので、そのメモ (12.) によったものであることが分かる。後にシュミットは明確にするためであろうか、「シュトルムによる」(民謡) を加えている。
5. シュミットはシュティフターについて『荒野の村』のような「みせかけ」、『ブリギッタ』のような「非真実」と批判的であるが (1. 4.) シュトルムはこれを否定し、これらの作品にはその様なところはなく、気にいっていると異議を唱えている。シュミットは後の『文学論集』ではここを削除した。これによりシュトルムがシュティフターを評価して

35) 原文とはシュミットの『シュトルム論』の原文を指す。() 内の数字は本稿のIIの区分を示す。

36) ラーゲ(SS,II,175f.)によるとシュトルムは Gervinus : Geschichte der poetischen Nationalliteratur der Deutschen, Leipzig 1844 の Bd.5, S.359 を参照したらしい。なお Gervinus, Georg Gottfried (1805-1871) は歴史学者、文学史家、政治家。

37) SCHMIDT : Charakteristiken (文献表参照)

いたことが良く分かる。

6. 『樅の木の下で』についてのシュミットの判断は(1. 5.) 正しいとし、これに関連して「シュトルムは無から何かを作り出すことができる」という奇妙な批評があったことを紹介している。そして、この作品は多く自らの回想に基づいていると伝えている。

7. 「原文 37 ページ〈感動を与え、衝撃を与えない〉については最後を参照」。(26.)

8. 「〈静かな敬いの気持ちのユーモアがある〉は素晴らしい」。これは『広場のほとり』のドクトルについてのシュミット評に関する。作者の意図するところでもあるのであろう。

9. 原文 38 ページの「〈聖ユルゲン〉の塔の周りには燕がさえずる……」(1. 8.) について、シュトルムはカナダで『聖ユルゲンの燕』というタイトルで英訳が出版されたことを伝え、実はこの響きのいいタイトルは正しくないといっている。「というのは燕は聖ユルゲンの破風の周りだけでなく、マリア教会の後に取り壊された塔の周りも飛ぶのですから。この教会は聖ユルゲンとは関係ありません。この塔は位置も、また私が描いたのとは違っています。」

10. シュミットは『片田舎』Abseitsの主人公の名と『レーナ・ヴィース』Lena Wiesの名を間違えているので訂正している。『文学論集』で後者は訂正されたが、前者はヴィープWiebのままになった。

11. 乾杯の辞「マルティエ・フロールス」の低地ドイツ語の引用の訂正。

12. シュミットの「追憶の永遠のランプを守る司祭である」(1. 10.) という言葉に感謝。

13. 原文 43 ページ(2. 1.) でシュミットは、シュトルムの回想の気分を示すため、ボーデンシュテットの詩行を引用しているが、作者の名は挙げられていない。それを付け加えるようにという助言で、『文学論集』では改められている。

14. この後シュミットは「シュトルムは対話の利用が極端に少ない」と述べているが、これに対し「ひょっとしたら幾らか簡潔すぎる対話は、昔の事柄にはより相応しくないでしょうか」と応じている。

15. 「『ツェプリアーヌスの鏡』には城の伝説も、一族の歴史も基になっていません。十年ぐらい前に息子の一人がマホガニーの箆箭に映るのを見て、とても不気味に思ったことがきっかけでした。私のメールヒェンは全ては創作です。ただ火男は民話によっていますし、ツェプリアーヌスは昔の魔法使いの名で、その魔法の書はプレーンの城の地下室に鎖に繋がれて置かれています。『ブーレマンの家』は物語も詩も童歌に刺激されました。」

これはシュトルムのメールヒェンについての興味深い発言であるが、シュミットが『ツェプリアーヌスの鏡』については城の伝説、一族の歴史が基になっていると記している(2. 2.) のを訂正したわけである。火男はもちろん『雨姫』に登場する。なお『文学論集』では誤謬は削除された。

16. 「萎びた小人の幽霊」(2. 2.) について「彼はまだ生きています」と訂正、また Schnorres

は Schnores だと修正しているが、『文学論集』では後者は見落とされている。

17. シュミットは原文 46 ページで「友人が射撃会で『ファウスト』をもらったとき、まだ [シュトルムは] ゲーテについては僅かしか知らなかった……」と述べている。これはメモ(14.)によっているが、実際はゲーテの原作ではなくレーチュの挿絵入りの梗概であったことを伝えている。³⁸⁾

18. 『マルテと時計』Marthe und ihre Uhr の主人公の老女は『画家ノルテン』を良く理解していたこと、また政治状況についても心得ていたなど、モデルについて語られている。シュミットは老女の理解力に疑念をもったらしい(2. 3.)。

19. メーリケ訪問に関する訂正。シュトルムが 1855 年 8 月メーリケを訪ねたのは「牧師館」(原文 46 ページ、2. 3.)ではなくシュトゥットガルトのメーリケ宅。メーリケは当時カタリーネウム女子高校教授として、文学を講じていた。

20. メーリケに感激して作られたソネットのことが原文(46 ページ)に出てくるが、これはモムゼンの作と伝えられている。

21. 『人形つかいのポーレ』に関して、シュミットは Mechanikus「機械技師」の代わりに Mechanisimus と間違えている(2. 3.)が、シュトルムは同意の Mechaniker と訂正。シュミットは後に Mechanicus と改めた。

22. 「ユリアーネの像は精神的にのみ存在」。これは『管財人カルステン』に関するコメントで、シュミットは「ユリアーネの像からデモーニッシュな破壊的靈氣」(3. 4.)を感じているが、具体的な絵は登場しないということであろう。

23. 原文 55 ページには『水に沈む』の素材となった教会の絵の銘が Aquis submersus culpa servi と引用されているが、これは例のメモでもそうになっている。culpa「罪」ではなく incuria すなわち「過失により」と訂正。これはもちろん後に正しく改められた。以下ドゥレールスドルフの教会のなかの 4 枚の絵について説明。「威厳のある好意的な目をした赤みがかかったブロンドの髪の立派な牧師とその夫人の半身像、その隣には十才ぐらいの少年、枠には先述の銘、反対側にはやや年上だが、まだ子供の娘。横の方にその少年の死の像、はっきり覚えています、手には赤い撫子をもっていました。この絵は私の作品が出た後、教会の塔の火災のとき失くなりました。……三・四年後(脳裏に焼き付いていたのは無慈悲な銘と死の像でした) 明るいい気持ちのいい秋の公用旅行の途上、作品に見られるようなもの全てが突如として浮かんできたのです。」ここでは作品成立の経緯の一部がうかがえる。

24. 作品のなかの絵画についてシュミットは『管財人カルステン』でも死んだ夫人の絵が

38) ラーゲ(SS,II,178)によるとこの本は Umriss zu Goethe's Faust, gezeichnet von Retzsch, Stuttgart und Tübingen : Cotta 1820; Retzsch, Moritz(1779-1857)については不詳。

登場すると誤解しているが(3. 8.)これを訂正。

25. シュミットは『水に沈む』には「夫妻の責任のみが耐えることのできる深い苦痛の気分で満たされている」(3. 7.)と述べているのに関して、「悲劇に対する主人公の特別な罪を求めるのは妙なことです。最近知人が言っていたのですが、ある人が私について書いて、私の描く人物は全て自らの罪ではなくて没落すると指摘しているようです。私の考えでは悲劇に対する責任は、もっと広くとらえなくてはなりません。すなわち主人公は本来、自らの罪によってではなく、人間性の罪ないしは、至らなさによって滅びるのです。これが彼自身のうちであろうと、彼の外にであろうと……『水に沈む』(ここでは私は夫妻の責任は全く考えていません)でも、『レナーテ』でもそうです。後者では敵は主人公の心の中と周りの世界にあり、愛の美しい時も崩壊するのです。『静かな音楽家』では悲劇は高度な認識・感情と、克服を試みても成功しない実際的能力の限界の間の、どうすることもできない葛藤にあるのです。……ここに私はずっと前から悲劇を意識してきましたし、本当の悲劇的運命は血統の遺伝にあると思います。私の本当の願いは([欄外に]このテーマは洩らさないで下さい)先祖から受け継いだ情熱、怒りや嫉妬などを完全に意識し、また過去にそれによって引き起こされた災難を知っている主人公が、自分ではそのような事件の発生を極力避けるように努めつつも、まさにそのために、自らとその幸福が失われるような災難が起こるといった小説を書くことですか」とかなり詳細なコメントと抱負を伝えている。ラーゲによると似たような希望はモムゼンにも表明しているらしい(SS,II,180)。ここにシュトルムの悲劇に対する責任問題についての考えが示されていて興味深い。またシュトルムが遺伝と悲劇ないしは責任問題に強い関心をもっていたこともうかがえる。

26. 先に7. で予告したコメントはシュミットの原文37ページ「彼の描く人物の諦念は、痛みを与えつつ同時に鎮痛剤の小瓶を差出しつつ、哀調を帯びた回顧の甘美な喜びを告げている。破壊的な力が介入してくるところでも、その敵意に満ちた支配が容赦なく示されることはない。……弱点、財産の喪失、生の嫌悪などが個々の人びとを滅亡させる。シュトルムはシュターツホーフのアンネ・レーネの死を描くが、彼女を追い立てはしない。ともかく我われは事件の報告を聞かされるが、その目撃者はいない。シュトルムは感動させようとするが、衝撃を与えようとはしない。そして彼はいつも長く余韻を残す効果を確信している」に対するものであるが、rühren/erschütternに関しては、シュトルムは最初から執心の様子で、最も気になる部分でもあった。シュトルムはここで「本来話の筋の進行に従っている場合に、作者の望み Wollen が問題になるとすれば、私も衝撃を与えることを望んでいたと言わなくてはなりません。例えば『水に沈む』や『管財人カルステン』ではそうです。しかし私が根本的に注目したかったのは、実際上はもっともですが、倫理的には不当にも不評を招くに至った〈感動〉—といたしますのも、まともな詩人によるなら、それはもちろん問題はありません。例えば『静かな音楽家』で、貴方がアポテオーゼと呼

ばれたコンサート・シーンは、感動と（心を攪む）衝撃との間にあります。あるいはその両者が含まれています。そこには高揚 *Erhebung* がありますから—この〈感動〉と〈衝撃〉の間には、私にとっては本来第三のものが、すなわち人生の諸問題についての厳しい思索へ読者を導くという意図が存在するのです。これは私独特のものと思いますが、また吟味してみてください」と記している。ここに我われはシュトルム文学の鑑賞の指針とでも言うべき言葉を読み取ることができよう。

そもそも、この *rühren/erschüttern* は必ずしも我われに明確な区分ではない。一応「感動」、「衝撃」と訳したが、前者も結構強い心の衝撃を必要とするかもしれない。前者についてグリム辞典は「1)何かを動かす、2)触れる、3)目など刺激する」などの後4)として「内的に動かす」を説明、a)で広い用法、b)で「しばしば狭い意味で、穏やかな感情 *sanfte empfindungen* 悲しみや嘆きや同情を引き起こす……」とある。しかし最後に *erweichen, erschüttern* が添えられているのでまたややこしい。しかし問題のシュトルムでの用法は「ほろりとさせるような感動」ということであろう。とすれば短編小説をドラマの姉妹ジャンルとみなし、悲劇的な作品を目指していた、少なくとも中期以降のシュトルムにとっては、シュミットのこの部分の批評は、やはりそのままは受け入れられなかったであろう。しかしこのようなシュトルムの反論・弁明にもかかわらず、シュミットは後の『文学論集』でもこの部分は原則的に変更しなかった。確かにシュトルムの作品は、特に初期の作品は「諦念と哀調の文学」と言えるし、広い文学史的観点に立てば全く的是ずれでもないであろう。これはやはり作者シュトルムの意図を離れて、シュトルム文学の一つの特質を浮き彫りにしている。それに「諦念」とか「哀調」については作者も認めていたと思われる。

27. 最後のメモは『シュトルム論』以後に発表された『顧問官殿』*Der Herr Etatsrat* について、シュミットが1881年5月の書簡で記した解釈に関連したものである。「倫理的・美的に醜いものは……芸術家がユーモアの鏡に映しだすことによってはじめて、芸術・文学で利用できるものです。……こうして我われが〈グロテスク〉と名付けるものが生ずるのです」というシュトルムの意見は、この作品理解に関して参考になる。

以上、個々にシュトルムの感想、訂正、反論を紹介してきたが、まことに興味深いものがある。シュトルムはなお1886年9月にこの論文に対し喜びを表明し、さらに短いメモを送ったらしいが、これは今日残されていない。

さてシュミットは後に1886年『文学論集』に本論文を収録するが、その際に当然、以上のシュトルムの意見などを参考に誤謬・誤植を訂正、また削除、補足を加え、さらに区分は序(0.)→1.、1.→2.、2.→3./4.、3.→5./6.と改めた。特に序(0.)の「家庭文学」に関する部分は簡素化され、また1882年末のシュトルム訪問の印象が最後に付け加えられた(7.)。

これについてもシュトルムは 1886 年 12 月(SS,II,S.134f.)感謝し、今回新たに加えた引用の詩に誤植があること、またメーリケの『古い風見鶏』に匹敵するものがない云々に対し、さらに『水に沈む』の言語表現のどこに欠点があるのか尋ねている。すなわち第一の訂正は『最愛の人を葬るがいい』の重大な誤植で終りから三行目の ringend は dringend となっていた。次の記述は、すでに『ドイツ展望』の論文にあった(49 ページ、2. 9.)のであるが当時シュトルムは異議を唱えなかった。今回「メーリケの詩のユーモアは、私の『十月の歌』Oktoberlied の抒情性より高いでしょうか」と言っているが、これはシュミットを善意に解すれば、ユーモアという点のみについて言っているように思われるから、シュトルムは今回広く考え過ぎたようで、最初は気にしなかったのも当然である。しかし『水に沈む』について「もし詩人が奇妙なシンタククス、語形変化、語選択などであちこちに余分な形式の装飾を施さなければ、異論なく新しい傑作となったであろう」という批評はシュトルムを少なからず刺激したであろう。元来単に「新しい傑作であろう」(3. 9.)としていたのであるから。もちろんシュトルムは「その通りかも知れません。私は分かりません。……こうした些細なことは、しかし貴方の論文——このような論文は恐らく、もう書かれないでしょう——に対する私の喜びを損なうものではないということは、言うまでもないことです」と続けている。いずれにせよシュトルムにとっては、いろいろ反論・異論もあったけれど、シュミットの論文は、やはり喜びであり、創作への励みともなったのである。

結 び

さて以上であるが、シュミットの論調は、もちろん当時の思潮の流れの中にあり、今日の観点からみれば必ずしも全面的に賛同出来ない面があることは否定できない。例えばゴルトアンマー(GOLDAMMER,965f.)の批判は「シュミットがシュトルムの後期作品の詳細に通じていたこと、またシュトルムの円熟期の作品を手稿のうちから知っていて、作者にいろいろ細かい点まで助言を与えていたということを我われが知らなければ、彼の間違った判断は純粋な無知のせいだと思わざるをえないであろう」とかなり手厳しい。すなわちシュミットは『シュターツホーフにて』、『館にて』、『管財人カルステン』、『キルヒ父子』Hans und Heinz Kirch、『ドッペルゲンガー』Doppelgängerなどの作品の人物や中心的対立を見逃したり、『水に沈む』他のいわゆる年代記小説の中の貴族や教会への批判を現実的なものと感じていないというのである。これは、しかしシュミットの無知のせいではなく、意識的な歪曲だろうと推定し、1886 年シェーラーの後任として当時のゲルマニスト最高の地位と目されていたベルリン大学教授となったシュミットは、社会的・国家的秩序にとって好ましくない傾向を指摘することはできなかつたし、したくなかつたのだと断定し

ている。もちろんシュミットは上記論文では1880年までの作品しか参考にできなかった。

ラーゲ(LAAGE:Leben,88)もシュミットが「家庭文学」の観点からシュトルムをとらえ、また「ドイツ的情緒」の文学とみなし、当時の誤ったシュトルム像形成に手をかしたと見ている。確かに冒頭の記述はこの観点を明確に示している。またヴァンソン(VINÇON Slg. M.,71;Selbstz.,156)も当時のシュトルム受容の賛否両論を紹介し、シュミットはシュトルムを「ドイツ国民的感情の誠実な市民階級のための作家として」留保しているとしている。これは、とりもなおさず「家庭の文学」の観点に関わっている。

要するに全面的な一致した評価は当時もなかったわけであるが、我われは一応このシュミットの『シュトルム論』から、十九世紀後半から今世紀にわたる一般的ないし公式的なシュトルム文学受容の姿——それは今日から見れば必ずしも正しくない面もあるが——を読み取ることができると考えていい。それはそれで興味深い情報である。それに全てが誤謬というわけではなく、見方によってはそうもとらえられるという部分も充分含まれている。

ところでゴルトアンマーが指摘しているような観点、すなわちシュトルムの政治的あるいは宗教的な批判には、特に第二次大戦後スポットライトが当てられ、それは、これまでの見方に慣れてきた読者には新鮮な印象を与えるが、全体的にみるならば、むしろ無常観に貫かれた哀調と抒情性という本質の方が読者には、より魅力的なように思われる。こうした抒情性という点では、シュミットの観点は全く的是はずれというわけではない。そして多数の読者をひきつけてきたものは、むしろ政治的・社会的批判などではなく、抒情的、牧歌的、家庭的な世界を描く「郷土詩人」Heimatlidher シュトルムであった。「かなりの人びとにとっては今日もなおシュトルムは郷土詩人である」(LAAGE:Leben,89)。それどころかシュトルムの郷土感覚は、故郷を失い拠り所を求める現代人をひきつけるものがあるのではないかという見解、例えばエーバーゾルトの言葉にも耳を傾けたい(EBERSOLD, 104)。政治的亡命という現実には確かに現代も存在するが、シュトルム文学の描く政治的・社会的問題はすべて、もはや現実的ではない。もちろん、そこに見られるコンフリクトは抽象化すれば、ある程度普遍性を持ち現代性も帯びては来る。しかしやはり、それはシュトルムの本領ではなかろう。それは、いわば抒情性をかきたてる道具立てとなるとき、最も効果的でシュトルムに相応しいと思われる。この点でシュミットのシュトルム論は、やはりシュトルム文学の特質をかなり良く伝えているのではなかろうか。しかしそれ以上にこのシュミット論文への興味は、この論文に対してシュトルムが直接批評・反論しているという点にある。この観点からこの『シュトルム論』は最も興味深い。それは、いわばシュトルムによって「認証された」作家論・文学論でもあるから。

引用・参考文献

- BOLLENBECK,G. : Theodor Storm. Eine Biographie. Frankfurt/M.1988
- COGHLAN,B./LAAGE,K.E.(Hrsg.) : Theodor Storm und das 19. Jahrhundert.Vorträge und Berichte des internationalen Storm-Symposions aus Anlass des 100.Todestages Theodor Storms.Berlin 1989
- EBERSOLD,Gunther : Politik- und Gesellschaftskritik in den Novellen Theodor Storms. Frankfurt/Main 1981
- FASOLD,Regina : Theodor Storm.Leipzig 1988
- FREUND,W. : Theodor Storm.Stuttgart u.a.1987
- G=Theodor Storm : Sämtliche Werke in vier Bänden. Hrsg.von P.Goldammer. 5.Aufl.Berlin/Weimar 1982
- GOLDAMMER,Peter : Theodor Storm und die deutsche Literaturgeschichtsschreibung. In : Aufbau 12, 1956
- LAAGE,Karl Ernst : Der kritische Storm. Husum 1989
- : Theodor Storm.Leben und Werk. 5.Aufl.Husum 1989
- (Hrsg.) : Theodor Storms Welt in Bildern.Husum 1987
- LL=Theodor Storm : Sämtliche Werke. Hrsg.von K.E.Laage und D.Lohmeier. Frankfurt/M.1987f.
- MÖRIKE,Eduard : Sämtliche Werke.2 Bde.München 1976
- SCHMIDT,Erich : Theodor Storm. In : Deutsche Rundschau 24,1880
- : Theodor Storm.In : SCHMIDT,Erich : Charakteristiken. 2 Bde. 2Aufl. Berlin 1902
- SS=STORM,Theodor - SCHMIDT,Erich Briefwechsel.Hrsg von K.E.Laage. 2 Bde.Berlin 1972/76
- STORM,Gertrud : Theodor Storm. Ein Bild seines Lebens. 2 Bde. Berlin 1912/13
- STORM,Theodor : Briefe. Hrsg.von P.Goldammer. 2 Bde. 2.Aufl.Berlin/Weimar 1984
- STORM,Theodor - MÖRIKE,Eduard Briefwechsel. Hrsg.von H.und W.Kohlschmidt. Berlin 1987
- STSG=Schriften der Theodor-Storm-Gesellschaft. Husum 1952ff.
- SUHR,Max : Theodor Storm in Hademarschen und Hanerau. Hanerau-Hademarschen 1988
- VINÇON,Hartmut : Theodor Storm. Slg.Metzler. Stuttgart 1973
- : Theodor Storm in Selbstzeugnissen und Bilddokumenten. Reinbek 1972
- WILPETR,Gero von : Deutsches Dichterlexikon. 3.Aufl. Stuttgart 1988

SCHMIDT の 2 文献のコピーの便宜をはかられた京都大学、広島大学等の関係者に深謝する。